

井伏鱒二における中間小説

—「お島の存念書」試論—

高木 伸幸

はじめに

井伏鱒二の「お島の存念書」(昭25・4と26・7)は、「誰か物好きの人」が「明治五年」に「七十何歳のお島といふ老婆の口述を筆記した」「口書」という体裁で、実在の人物高島秋帆の半生を描いた小説である。「若年のころ、深川で芸者をしてゐた」際に高島秋帆に「一と目ぼれ」し、天保十二年春には、いわゆる秋帆の疑獄事件に連座した女性として設定された「架空の人物」お島を語り手に据え、お島による秋帆とその時代にまつわる回想譚として物語は進行していくのである。つまりこの小説は、高島秋帆を主人公にした歴史小説的な側面と、秋帆に思いを寄せるお島をヒロインにした恋愛物語的な側面とがあり、それらが合わざり成り立っていると見做すことができよう。

榎林滉二氏の『「お島の存念書」考—井伏鱒二の「志向」—』(平9・2『文教国文学』第35・36合併号)は、そのいわば二面性に注目し、作品を分析している。「第二次大戦後の井伏鱒二の文学」には「戦争が生み出した非日常の告発」と「我々の身辺に存する、日常庶民哀歎の描出」という「二つの事象描出の隆替があり」、「お島の存念書」

は「その隆替のはざまにあつて、その両翼を一つの作品で持ち、その様相を鮮やかに表象している作品」だと論じているのである。詳細は後に記すとして、榎林氏の見解はこの小説のモチーフを井伏文学全体の中から捉え分析した点において、的を射たものと考えられる。本論はそれに異議を唱えようとするものではない。がしかし、この小説を戦後の日本文学史の中に置き、改めて検討してみた場合、いま少し違った角度からその二面性を、ことにお島の恋愛物語の側面を捉え直すことができるのではないだろうか。以下、少し考察する所以である。

一

「お島の存念書」について、最初にその歴史小説という側面から考えてみよう。それにあたつて、先述のごとく、榎林滉二氏がこの小説の一面として、「戦時体制」の「告発」というモチーフを指摘していることに注目したい。この小説を歴史小説として捉えた場合、以下に記すように、そのようなモチーフの存在が確かに認められるからであ

る。

まず「お島の存念書」の史実に拠ったあらすじを記す。主人公高島秋帆は、「砲術の練達者」として注目され、幕府の命を受けて、練馬村に近い徳丸原で「砲術訓練」を行い、大きな成果を挙げる。しかし世間では、老中水野越前守による天保の改革の下、町奉行鳥居耀蔵らが町民を厳しく取り締まり、洋学者を毛嫌いするなど、不穏な空気が流れていた。結局、秋帆は、彼の成功を妬んだ鳥居らによって、多くの洋学者たちとともに冤罪で陥れられる。そして「永預け」の身となった秋帆は、武州岡部の陣屋に幽閉されるに至った。

以上のようなのであるが、これは多くの思想家たちを弾圧し、また様々な規制を加えて国民を苦しめた、戦時中の国家体制を彷彿させるものと言えはしまいか。

次いで横林氏の論考にも引用されているように、伊馬春部の「解説」(角川文庫『屋根の上のサワン』昭31・12)には、井伏からの聞き書きで、次のように記されている。

町奉行が目明をつかつて、江戸市中の掃きだめや塵芥箱を調べさせ、また禁制の絹の袖裏を着用している婦人の袂を切つて廻る。当時は、そのまま戦時中の為政者とその周囲の仕業と同断である。当時の不愉快な時勢に対する憂晴らしのつもりであったという。こういうことも戦後やつと書けるようになったのである。

ここで「戦時中の為政者とその周囲の仕業と同断」だと記されているのは、作中において、天保の改革の一つ、「質素儉約の心得」が下された江戸市民の受難を描いた場面を指す。その聞き書きの通り、そこでの記述は、「贅沢は敵だ!」とのスローガンが掲げられた、戦時

中の暗い世相と確かに通ずるところが多い。例えばその場面には、「野菜魚鳥の食物は季節外れの初物いつさい売買すること相成らず」という「御禁令」や、「女髪結ひも御法度」という「御禁令」などが記されているが、それらは昭和十五年七月に公布され、食品の販売にまで制限を加えた「奢侈品等製造販売制限規則」や、十四年六月に決定された女性の「電髪(パーマネントウェーブ)禁止」に一致するかのようである。

さらに戦時体制を告発する気配は、次のような記述にも濃厚である。老中水野の厳しい改革によって、「火の消えたやう」になった江戸市中において、「いろんな文句の『ちよぼくれ』」、すなわち幕政批判の歌が流行する場面がある。そこで語り手兼ヒロインのお島も、「苗売り」という題の「ちよぼくれ」を歌っており、その文句は次のようである。

「苗や苗や、苗はよしか、初物の茄子がない、胡瓜がない、隠元豆のもやしがない、白粉あんまり塗り手ががない、このせつ師匠の花見がない、浄るり新内寄場がない……」

この文句は何を意味するのであろうか。本論の執筆にあたって、戦時下の国民生活を調査した過程で、『衆議院議事速記録』第三十号(昭15・3・21、官報号外)にそれを知る手掛かりが見つかった。昭和十五年三月二十日、物資不足に対応すべく「食料確保二閣スル決議案」が可決された際、安藤孝三議員が国民の声として、次のようなエピソードを紹介していたのである。

スル壇上デ申上ゲルノハ如何カト思ヒマスルガ、閣僚諸公ハ或ハ御存ジナイト思ヒマスノデ、昨今市井ニ流行致シテ居リマス今

様ノ「ナイくツクシ」ト云フノ一寸御紹介申上ゲマス、「米
 ナイ、炭ナイ、醤油ナイ、砂糖ナイ、味噌ナイ、燐寸ナイ、肥料
 ガナイカラオ米ガ作ラレナイ、本當ニヨ一ナイ内閣ダ」ト云フノ
 デアリマス（笑声）是ガ国民ノ声デハナイカト思フノデアリマス
 （後略）

ここに見る今様の「ナイくツクシ」、つまり戦時下の国民による
 政府批判の歌は、お島が歌う「苗売り」に酷似している。これはただ
 の偶然ではあるまい。

もう一点、井伏は「史実ものについて」（昭10・12・16『帝国大学
 新聞』）というエッセイで、次のように書いていたことにも言及して
 おこつ。

私も昨年「青ヶ島大概記」といふ史実小説を書いて以来、四篇
 史実小説を書いてみた。（中略）一面の理由をいつてみれば、私
 は史実に自分を託すといふよりも、むしろ時代を託して書いてみ
 るつもりであった。現世への鬱憤も反抗の心持も自分で秘かに癒
 しながら、しかも外面さりげなく史実に託して書けそうなところ
 に史実小説を書く面白さがある。

この文章は戦前に発表されたものであるが、先の聞き書きによる
 「解説」と通ずるところもあり、十数年後に書かれた「お島の存念書」
 にも、そのままあてはめてよいのではないか。井伏は史実に「戦時中」
 という「時代を託し」つつこの小説を創り上げ、自らの心に溜まっ
 いた「鬱憤」を「癒し」たのであろう。

かくて、歴史小説としての「お島の存念書」には、戦争告発という
 モチーフが描かれていることが改めて確認された。

しかし、ここで次のことにも注意しなければならない。作者はそう
 した一方で、全てをお島の目を通して描いている故に、そのモチーフ
 を必ずと言っていいくらい、高島秋帆に寄せるお島の恋心を添えた形
 で読者の前に提出していることである。

例えば、先のお島が「苗売り」を歌うエピソードも、砲術指南のた
 めに秋帆が江戸の長崎屋に滞在した折、お島が女中に姿を変えて彼に
 近づこうとする場面の中で記されている。そこでお島は、時に秋帆か
 ら「苗売り殿」と親しげに呼ばれている。しかし畳に「の」の字を書
 いて自分の気持ちを伝えようとしても、秋帆の反応は冷たく、お島は
 思わず涙する。そうしたことが、むしろ主たる物語として記されてい
 るのである。

さらにこの小説の一つの山場に目を向けてみよう。鳥居耀蔵や、幕
 府鉄砲方の井上左太夫らが秋帆をついに冤罪で陥れ、お島もそれに連
 座して取調べを受けるに至った場面である。そこで役人たちは、お島
 のことを「極悪人に助勢いたしたる不屈者」と呼び捨てにし、「急度
 お叱り」の刑を言い渡して秋帆に「誣された鼻くた女のやうに悪口雑
 言」する。対してお島は役人たちに次のように言い放つ。

「急度お叱り、有難う存じます。でも憚りながら、私、秋帆先生
 に誣されたこと、まだ一度も御座いませぬ。秋帆先生に誣されな
 かつた代り、何やら狸と狐に誣されたかもしれませぬ。おや、そ
 の狸と狐、一つ穴から這ひ出して、禪をしてるやうに見えて参り
 ました。その禪も、見たところ越中禪のやうで御座んすね。おや、
 越中禪の、禪かつぎで御座いました。」

「越中禪」とは「水野越前守」を「当てこすつたもの」で、「禪か

つぎの狐と狸」とは「二つ穴の鳥居耀蔵と井上左太夫を当てこすつた」言葉であった。このお島の「辰巳風の啖呵」について、榎林滉二氏は「戦中の軍国体制への諷諭が込められているもの」で「井伏のそれらへの憤りが思量されるどころ」だと論じている。確かに幕府の「ご威光」を守るために進歩的な高島秋帆を弾圧した連中を激しく攻撃したこの言葉は、戦時中に共産主義等の思想弾圧を行った国家体制への、天皇を中心に据えたその為政者たちへの批判と解釈することもできる。井伏がそのような一つの意図をもってこの言葉を記したという意見に、私も全く異論はない。

だが、このお島の啖呵は、「秋帆先生に誑されたこと、まだ一度も御座いませぬ」という言葉から始まっていることに注意されたい。つまり、そこに表れたお島の怒りは、秋帆を「極悪人」と決めつける役人たちから彼を庇おうとする感情によつて発しているようにも見えるのである。加えて、この後には、そのような言葉を吐いた代償として、「棒で打ちすゑられ」た上に、増刑されて「永牢の云ひ渡し」を受けたお島の気持ちが次のように語られている。

悲しいよりも口惜しさが先に立ちましたが、この無慙な身の上を秋帆先生がちつとも御存じにならないと思ふと、急に悲しくなつて涙がこぼれて参りました。

このように見てくると、この小説においてある種の戦争告発が為される際に、それと併せてお島の恋愛感情、ことに秋帆を思いつつも、その気持ちが届かぬ悲しい恋心がいつも決まったように描かれているのがよくわかるであろう。その辛口のモチーフがお島の恋愛（悲恋）物語というやや甘口のオブラートにくるまれて提出されているのである。

る。しかも興味深いのは、秋帆が岡部の陣屋に幽閉される物語の終盤つまり最後の三分の一の部分に入ってから、そのお島の悲恋物語の趣がより強くなっていることである。それは次のような具合である。

刑が許されて吉原に芸者に出ていたお島は、岡部の陣屋に幽閉された秋帆に会いたいと願う。そこで馴染み客の絹問屋に旅銀を出させ、彼に岡部まで連れて行ってもらう。そして岡部にとどまったお島は、「私は気が触れてゐたのでは御座いませぬ。ただ秋帆先生にお目にかかりさへすればよろしいので御座いました」という気持ちで、様々な努力を重ねる。しかし結局はうまくいかず、「私はもう秋帆先生にお目にかかれなくても仕方がないと思ふやうになつてをりました。待ちくたびれて、自分のことを嫌やらしい女のやうな気がしてゐたので御座います」と考える。お島は秋帆に会うことを断念し、物語は幕を閉じる。これはまさにお島の悲恋一色の終盤と言ふべきであり、戦時体制への告発は影を潜めているように見えるのである。

このようなお島の悲恋物語の側面について、先述のごとく榎林滉二氏は、「日常庶民」の「哀歎」を「描出」するという、井伏文学の一つの主要モチーフの表現としてそれを捉えている。そして戦争告発という「非日常」と、「庶民哀歎」の「描出」という「日常」とが、一作の中で「隆替」しているのが「お島の存念書」の一特色だと記す。加えて、ことに終盤に至つてお島の悲恋物語の趣が強くなっているのは、井伏が「書きゆくにつれ、お島に同化し、お島の日常に心のありかが傾いた」ためであり、そこに作者の「日常への回帰」が認められると指摘している。

榎林滉二氏の意見は、井伏文学の全体を視野に入れ、作者の内的モ

チーフとの関わりから捉えたものとして、大いに説得力がある。しかしこのお島の悲恋の描かれ方は、この小説が発表された当時の文学界の潮流に目を向けて捉え直す必要もあるのではないか。

例えば、お島の悲恋を描くにあたって、井伏は次のような二つの描写を加えている。

まず武州岡部に到着したお島が、旅銀を出させた絹問屋と旅籠で一夜をともしにする様子を次のように描く。

絹問屋さんは（中略）蒲団のなかの腹這ひで、私に喫ひつけ煙草を渡してくれました。その日の道中、畑の麦穂波ばかり見ながら来たせぬか、寝てゐる私の頬に触つて来る絹問屋さんのほつれ毛が、いがらつばいやうな気がして厭やでした。

次いで岡部にとどまつたお島が、土地の顔役累代五郎助を利用しようと思ひ、彼と酒食をともしにするが、五郎助に機嫌を損ねられる様子を次のように描く。

五郎助は膨れ面をして、ふいと立つて手洗ひに行きました。部屋に戻つて来ると、いきなり私の横に坐り込みました。私はお酌するつもりで一升徳利を手に取りました。五郎助は私の肩に手をまはしまして、私が肩でそれを押しのとくと、矢庭に私を横倒しにして、両足の親指を右と左に分けて空につまみあげました。痛くて痛くて、それこそ痛いのなんのつて耐へがたい痛さで御座いました。同じいたづらにしましても、このやうな手荒らな仕方には、私、長いあひだの水商売でも、はじめてお目にかかりました。一升徳利が畳の上にごりまりました。

「オカンさあん、オカンさあん、徳利がころがつた……」

と、私は夢中で手を鳴らしました。

五郎助は弾じかれたやうに手を放して、急いで床の間を背にお膳の前に坐りました。

秋帆に会うために、前者は好きでもない男と同衾するお島を描き、後者は利用しようとした相手から逆に襲われるお島を描き、ともにこの作家にしては珍しい、艶のあるやや色つばい表現になっている。

実はこのやうな部分、つまりこの作家らしく節度のある書き方ではあるが、やや色つばい表現を加味してお島の悲恋を描いているところに、時流に対応しようとした井伏の苦心の跡が認められるように思われるのである。次に「お島の存念書」が発表された当時の文学界の趨勢に目を向けてみよう。

二

「お島の存念書」は、昭和二十五年から二十六年にかけて発表された。この時期の文学史的状況として、次のようなことを押さえておきたい。昭和二十年の敗戦を切っ掛けに、それから数年の間に多くの新聞、雑誌が創刊、復刊し、それに伴い読者の質も変化し、〈中間小説〉と言われる小説が現れ、多く書かれていたことである。

中間小説とは、ごく一般的に「純文学と大衆小説（通俗小説）との中間をゆく小説」³を言う。言い換えれば、純文学の持つ文学性や芸術性と、大衆文学の持つ娯楽性や物語性を併せ持った小説という意味である。このように言うとき、高い理想を持った作品に与えられる言葉であるように聞こえるが、決してそうではない。村松剛が「擬似純文学、

擬似通俗小説への総称」と記した⁵ように、どちらかと言えば否定的な意味で用いられている。しかしここでそのジャンルの善し悪しを問うつもりはない。ともかく、そのような意味づけの中間小説と言われる作品が、多くの創刊、復刊した雑誌、例えば『日本小説』（昭22・5創刊）、『小説新潮』（昭22・9創刊）、『小説公園』（昭25・1創刊）、『オール読物』（昭21・10復刊⁶）などの要請もあって、昭和二十年代には盛行していたのである。そしてそれらの雑誌は、ごく普通に（中間小説誌）と呼ばび習わされるようになつていたのである。

「お島の存念書」は、このような時流の中、第一部（題「お島の存念書」）を『小説公園』昭和二十五年四月号に、第二部（題「お島の語る秋帆先生」）を『小説公園』昭和二十六年四月号に、第三部（題「岡部の陣屋」）を『オール読物』昭和二十六年七月号にそれぞれ分載する形で発表され、単行本『吉凶うらなひ』（昭27・1、文芸春秋新社）収録にあたって一つにまとめられた。つまり、初出時には、いわゆる中間小説誌に発表されていたのである。だとすれば、作者はこの小説をそれ相応の作品として書くことを要請されていたのではないかと考えられる。

実際、『お島の存念書』は、史実に託した戦争告発という、いわゆる純文学的なモチーフと、お島の悲恋という、いわゆる大衆文学的な物語性とを併せ持っている。作者がこの小説を中間小説として書いたことはまず間違いないだろう。

だがここで問題にしたいのは、井伏がそれを中間小説としてどのような形に仕上げたかである。『小説公園』、『オール読物』両誌の誌面の傾向から、当時の一般的な中間小説の特色を考えてみたい。

まず『オール読物』は、昭和二十一年十月の復刊号において、その「編輯後記」に、「インテリ向きの高級娯楽雑誌と呼ばれ」た「名譽ある伝統をまもつて、美しい、たのしい、誰にでも親しまれる立派な雑誌を育てあげてゆきたい」という「念願」を記している。

一方の『小説公園』は、二十五年一月の創刊号の後記にあたる「編輯室」で、「誰でもが愉しめる立派な小説に充ち、気品があつて新鮮で美しさに溢れた雑誌を創りたいといふ念願」の下で同誌が発したことを明らかにしている。

これら両誌のいわば復刊、創刊の辞を読み較べて気づかされるのは、その伝統に関する記述を別にすれば、多少のニュアンスの違いはあるが、どちらも（美しいこと）と（たの（愉）しいこと）を重視し、誌面作りの上でよく似た「念願」をしていたことであろう。おそらくこれは次のような理由による。和田芳恵によれば、『小説公園』の（創刊時の）編集名義人の吉川晋は英治の末弟で、同僚幹部の石井英之助とともに文芸春秋社員だった⁷ため、同誌は文芸春秋社が刊行していた『オール読物』に近い編集だった⁸とのことである。つまり『小説公園』、『オール読物』両誌は、その戦後の出発点において近い関係の編集者によつて刊行されていたため、おそらくは後発の『小説公園』が伝統ある『オール読物』に倣ったことにより、誌面の方向性において両誌は重なるところが多かつたと推察されるのである。

「お島の存念書」が『小説公園』と『オール読物』に分載されたのも、おそらくはこのような両誌の関係があつてのことであり、それらが誌面作りで目指すところの影響がそこに表れている可能性は高い。しかし（美しいこと）とか（たのしいこと）といった言い方はやや漠

然としている。二つの雑誌の方向性について、いまいし具体的に踏み込んでみたい。

『オール読物』復刊号の「編輯後記」を見直してみよう。そこには次のような言葉も記されていた。

色つばい読物もたくさん盛りました。(中略)愛慾を通して人生の真実を描いたものです。また小説や読物に必然的ににぎみ出てくる色つばさといふものを、排撃する必要はないと思ひます。

ここで言う「色つばい読物」とは、おそらくその復刊号に掲載された邦枝完二の「好色五人女」、小池忠雄の「接吻」、松井翠聲の「ラヴ・シン物語」などを指すのであろう。従つてこれはもちろん復刊号について記した言葉である。しかし、それは同時に、その後の『オール読物』の誌面の、また『小説公園』の誌面の、一つの方向性も示しているように思われてならない。

例えば、「お島の存念書」の第一部が掲載された『小説公園』の二十五年四月号を見てみよう。その目次には井伏の同作を含めて九本の「傑作読切小説」が並べられている。その中で、井伏は右から三番目に見られるのに対し、右端の冒頭には田村泰次郎の「女の復讐」と題した中篇が置かれ、左端の結びには「川端康成氏推薦の新人」との肩書が付けられた小磯なつ子による「雪化粧」という長篇が置かれ、田村と小磯の作品に力が入れられていたことがわかる。田村の作は、戦時中に愛人の将校に棄てられたことで、軍の慰安婦に落ちた過去を持つヒロインの雅代が、戦後になって自分の肉体を武器に金儲けなどをして、かつての愛人に復讐しようとする、かなりエロチックな物語である。小磯のそれは、バレエ教師の葉村英二とその教え子の三千子が

恋仲となるが、三千子には既に三十も歳の離れた夫がいたという、やお決まりの悲しい恋の物語である。つまりどちらもある種の女性の色つばさ、愛慾、あるいは恋愛を前面に押し出した小説であり、『小説公園』の一つの方向性が窺われるのである。なお同誌は同じ号に「女性の五つの美」と題したグラビアを組み、芸術的にはあるが、女性の美しさを視覚的に活かした誌面であったことも加えておきたい。また説明は略すが、第二部が掲載された同誌の二十六年四月号の誌面も、ほぼ同じ傾向にあると言うことができる。

さらに第三部が載った『オール読物』の二十六年七月号はどうだろうか。そこで何より注目されるのは、「異色恋愛小説三人集」と銘打った企画が組まれていたことである。その企画は、久生十蘭の短篇「白雪姫」と、井上靖の短篇「夜明けの海」とを並べ、そしてもう一本として、実は「お島の存念書」の第三部、つまり井伏鱒二の「岡部の陣屋」を収めていたのである。それら三つの「異色恋愛小説」の詳細はもはや記さないが、同号の目次を見ると、久生の作には「氷河を舞台に淫蕩女ハナを繞つて起る哀愁恋愛の物語り」との、井上の作には「心中事件に纏わる愛情を追及して遂に人間の本心を衝く」との、そして井伏のには「粹な深川芸者『お島』の高島秋帆への恋慕を描いて絶妙」とのコピーが、それぞれ添えられている。復刊号の「編輯後記」に示されていた一つの方向性が、同号にも受け継がれていたことは明らかであろう。

以上のように見てくると、女性のお色気と恋愛(ことに悲恋)が、おそらくは戦前の抑圧の反動もあつて、小説の題材として、この時期には頻繁に描かれていたのがよくわかる。そして、それだけに、中間

小説の重要な要素としてそれらは定着したのである。ことに『小説公園』と『オール読物』では、両誌が「念願」する美しく、たのしい誌面作りのためにも、それらを表すことを重視していたと推察される。そして「お島の存念書」にも、そのような、いわば中間小説の類型に則った部分が認められることは、もはや言うまでもあるまい。お島の悲恋物語という側面があり、井伏らしく抑えた書き方ではあるが、お島をやや色っぽく描いた場面が見られる所以である。

そしてここに来て、その終盤にお島の悲恋物語の趣が強められている理由も見えてきたと言えよう。その部分は、初出では第三部「岡部の陣屋」として発表されたところであり、「異色恋愛小説三人集」と銘打った企画に組み込まれていた。対して初出時に第一部、第二部だった部分は、特にそのような企画の中になく、あくまで一つの小説として発表されていた。もし第三部の組み込まれていた企画が、作者の執筆段階から決定していたものであるとすると、井伏はその部分を「異色恋愛小説」という制約の下で書かねばならなかったことになる。もちろん、第一部や第二部の場合も、発表誌が『小説公園』である以上、恋愛は添えなければならなかったであろう。しかし企画内にあるのとは違い、恋愛を必ずしも強く打ち出す必要はなかったと思われる。ところが、第三部では、その制約により、恋愛を第一に描かねばならなかったのではないだろうか。その結果、三つの部分を一つにまとめた「お島の存念書」として見た場合、バランスが悪くなったと考えられるのである。言い換えれば、「お島の存念書」の終盤には、発表誌の要請がより強く表れているのであり、この小説が時流に対応した作品であることをそのバランスの悪さが象徴していると言える

かもしれない。

おわりに

以上のごとく、「お島の存念書」は、史実に託した戦争告発という側面と、お島の悲恋物語という側面を持ち、特に後者にはお色気の要素が加味されていることから、発表当時に盛行していた中間小説のタイプの類型に則った作品であろうと考えられる。そこにはおそらく『小説公園』と『オール読物』という発表誌の要請が表れており、それは終盤になってお島の悲恋に傾きすぎってしまうというバランスの悪さにもつながっている。時流に応じて書かねばならなかった作者の苦心が窺われるかのようなのである。

しかしそのような中でも、この「お島の存念書」には、文学者として自らに妥協を許さぬ井伏の姿勢が認められる。戦争告発という辛口のモチーフにその文学性が支えられていることはもちろんであるが、ややお色気をもたせた二つの場面においても、その表現には節度があり、品位は保たれているのである。そうした意味で、この「お島の存念書」は、時流に対する井伏の苦心と抵抗のあり方を示してくれる一作と言えるかもしれない。

注(1) 「覚え書」(『井伏鱒二自選全集』第二巻(昭60・11、新潮社)に次のように記されている。「『お島』と云ふのは架空の人物で、『秋帆』は実在の人物である。」

(2) 本論において、日本の戦時中についての検証は、江口圭一著『大系日本の歴史14二つの大戦』(平元・5、小学館)、『国史大辞典』全十

五巻（昭54・3〜平9・3、吉川弘文館）などに拠った。

(3) 榎林澁二氏は、「お島の存念書」における初出稿から単行本『吉田うらなひ』収録にあたっての推敲、さらに『井伏鱒二選全集』第二巻収録にあたっての改稿のあり方を検証している。それらにおいて井伏は、お島の恋愛の過剰さを削るなどして、「日常への深入り」を「修正」しようとする姿勢があると言う。また、初出時の第二部

「お島が語る秋帆先生」には、ちよぼくれを歌うお島について詳しく記した前書きがあり、それを単行本収録にあたって、秋帆が長崎屋に泊まっている頃のお島の説明として組み込んでいることに触れ、「反骨芸者の語る秋帆の悲劇と幕制批判」から「秋帆への心を通わしてゆく反骨の芸者お島と秋帆の物語へと変わってきている気配がある」とも記している。榎林氏は「日常」と「非日常」の「隆替」を以上のように説明している。

(4) 今村忠純「中間小説」(『研究資料現代日本文学 小説・戯曲』昭55・9、明治書院)

(5) 村松剛「中間小説論—リアリズムの問題をめぐって—」(昭29・12『文学界』)

(6) 戦後、『オール読物』は昭和二十年十一月にまず復刊したが、用紙難のため再び休刊が重なった。二十一年十月号から以降、継続発行されたため、同号が事実上の戦後復刊号と見做される。

(7) 「小説公園」(日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第五巻(昭52・11、講談社))

(8) 『小説公園』創刊号の冒頭には、「名作温泉めぐり」と題したグラビアが組まれている。そこには入浴中の女性の姿が多く写されており、戦前の反動もあって、女性の美しさやある種のお色気を視覚的にも活かそうとする同誌の一特色が表れている。

(9) 例えば同号には、宮内寒瀾の「隣室の女」、池田みち子の「どん底の貞操」、土師清二の「金髪の女」などの小説が掲載されている上に、その目次にはイラスト風に女性の裸体が描かれている。

井伏鱒二の作品引用は、全て『井伏鱒二全集』全二十八巻別巻二(平8・11〜平12・3、筑摩書房)に拠った。また、その他の引用文中、旧字体は全

て新字体に改めた。

(たかぎ のぶゆき、ラ・サール中学校・高等学校教諭)